

ヨーロッパ仕様のアルファ・ロメオ・スパイダー。
1962 ccの4気筒DOHCオッシン・キャブで、128 ps / 5400 rpmと
18.1 km / 4000 rpmを得る87年モデル。
九州は佐世保の学習塾の先生がこのアルファ・スパイダーの
オートマチックに乗っているという。
フルツチオ(ランボルギーニ)三浦が自らの75ツインスパークを駆って、
その理由を探るべく本土最西端へとドライブ!

文＝三浦康彦(本誌) 写真＝清水博孝

眼下には紺碧の海が見える。空は深く澄んだ青だ。その間に緑の陸がこんもりと横たわる。僕は紺碧という言葉の意味をそのとき理解した。関門橋を渡り、僕と僕のアルファ75は、生まれて初めて九州に足を踏み入れた。オートマティック・トランスミッションに載せ替えた87年型アルファ・スパイダーに乗る姉川賢次さんに会うため、会社の車でもメーカ車の広報車でもなく、自分のクルマを駆ってようやく九州までたどりついたのは、7月2日の午後2時すぎだった。やっとな、かつこつこつと感慨を深めたのにはわけがある。

長崎を目指して自宅を出たのは7月1日の朝の6時。途中カメラマンの清水さん宅に立ち寄る。ちよつと早く出すぎたかなと思ひ、海老名サーピス・エリアでうんと肉マンという変則的な朝食をとった後、ガスを満タンにして、あとは一気に「ゴー・ウェースト!」と歌いまくった。これから走る見知らぬ道のことを考えるだけで、浮き足立ってしまふ。右足にも力が入るといふものだ。ロング・ドライブの始まりはいつもこうだ。どんなに空は曇っていても。

海老名を出てまもなく、厚木を通過する。「何か点いてますよ」とカメラマンの清水さんが言うので、僕は警告灯ボードを一瞥して「気にしないでいいんです。これは」と答えた。オルタネーターの警告灯だった。イタ

ファンベルトを装着してもらい、クーラントもきっちり補充した。もう万全、なはずだ。気を取り直して、午後3時半、横浜を再出発した。しめて6時間のロスであった。「ゴー・ウェースト」。僕は6時間前よりもかなり控えめに口ずさんだ。

しかしそれ以降、75は快調だった。楽しみのため、むやみに3速に落としたりしないかぎり、水温は約80度を保ったまま。外は暑いのに冷房もよく効く。異音もない。75のホイールベースは2510mm、このクラスのサルーンの中でも特に短い。それにもかかわらず、75は高速道路を巡航するとても快適な乗り物となる。段差はよくいなすし、直線では矢のように進む。100 km / hは5速で2800 rpm。高回転域では比較的(といつかとても)うるさい4気筒エンジンであるが、コンスタント・スロットル時は心地よい燃焼音がだんだん耳になじんできて、運転する者を静寂へと導いてくれる。芭蕉の聞いた蟬の声はこういう質の音だったに違いない。

1日目は神戸に宿をとり、2日目は吹田を経由して中国道。兵庫、岡山、広島、山口、すこしだけ島根県に入って、再び山口。中国道は確かに走りやすいけど、見える景色は山ばかり。と、そろそろ厭きてきたころ、左手に平野が開け、山陽新幹線が走る。遠くに海が見える。そういう伏線があつて、道は一気に関門橋、九州道へとつながる。というわけで、やっとな九州にやってきたのだ。

鳥栖インターで長崎自動車道に入り、武雄から西九州自動車道を使うと、ほどなく佐世保である。

佐世保は天然の良港で、今なお軍港としての役目がその多くをしめる。そして旧海軍兵器廠、佐世保重工のいかドックがある。住宅は追いやられたように山の斜面にへばりついて林立している。地震がおこったら?と心配したが、このあたりは日本でも最も古くて固い地層だから大丈夫なのだそう。明日はようやく姉川さんに会える。佐世保

車乗りの常で、警告灯は信用していないから、「ほほう、変わった警告灯がついたもんだ」と思っていた。ふと目をやったら水温計はすでに100度を越えていた。ギョつとして速度を下げるが、水温はみるみる登り、赤い警告灯までついてしまった。あわてて路側帯に75を止めボンネットを開けた。さいわい煙も水蒸気も吹き出てこなかった。

なんでもないじゃないか、と思ったが、ヘッドやバッテリーの脇に、細い枝のような、繊維状のものがいつぱいくっついてた。よく見ると、こつぱみじんに切れたファンベルトだった。どうりでオルタネーターとウォーターポンプが回らなかったわけだ。警告灯もたまには信用したほうがいいと思った。

秦野中井までJAFに牽引してもらい、そこにコーンズ・モーターズのトランポがやってくる。と、こういう段取り。いやはやなんとも、こういうことは手慣れたというか……。コーンズのメカニックの人に、気づかないうちにファンベルトが切れていたこと、これから九州まで行くので、ファンベルトを装着して、すぐにでも出発したいことを告げた。75のファンベルトは、三点に張られたその真ん中にエンジンとラジエターとを結ぶ冷却水のパイプが通っていて、工場ではこれを外さないでベルトの交換ができない仕組みになっている。だから秦野中井の料金所の脇では交換できないのだ。まったくもって、イタ車。な整備性のおかげで、清水さんと僕はゆつくりと昼飯の時間をとることができた。食べたのがどうんというのは問題ではあるが。

の市内のガソリンスタンドで洗車してもらった。埃にまみれていた75は、艶やかな赤色を、強く張りのある光の下でとり戻した。夕方5時。まだ陽は高く、暑い。75の赤に空の青が写り込んだその色は、摩訶不思議な初めて見る赤だった。太陽が西の海に沈んでゆくのが見えた。

四

佐世保の朝はとても気持ちよかつた。は当たり前のように青く、弓張岳の頂上には帽子のような雲がかかっていた。雲は西の方からやってきて東の方に消えて行く。ここでは海のほうからやってきた新しい風に、日本で最初に触れることができる。

僕たちは松浦鉄道沿いの細い道を佐々に向かった。小さな駅をいくつか通り越して、佐々の駅にたどりついた。歩道を掃き掃除しているおじいさんに、姉川さんの塾の場所を聞いてみた。

「時習館という塾はどこですか」

「はあ」

「時習館という塾を捜しているんですが」

「井上さん? はて」

僕はどうしたものかと思つたけれど、ひとまず補聴器をつけたおじいさんの耳元で、ちよつと大声を出してみた。

「井上さんじゃなくて、勉強するところ」

「はあ、勉強ね……ならそこだろう」

と2軒隣の建物を指した。

午前11時。出勤したての姉川さんは、所で髭を剃っていた。プリントの入ったシャツに細い黒のパンツをはいていて、生というよりは、ミュージシャンはようこそ、どうぞどうぞと歓迎する感じでくれた姉川さんの言葉は、なにかにかしいものが感じられ、外見とはまた違ったギャップがあつた。やはり先生なのだ。

姉川さんは学習塾「時習館」を営んでいる。時習館は佐々の駅から歩いて3分、ろにあって、30人は入る広い教室を持ち、学校高学年から、高校生まで広く教えて、姉川さんも教えるが、ほかに常駐の先生が2

小佐々にある西川内橋は大正9年に建造された。別名を太鼓橋。こんなに味のある、人間味あふれた橋は、これからもう作られないかも知れない。もう作られていない、スパイダーと75とで記念写真を撮ることにした。

アルファ75ツインスパークで、(たぶん)日本でいちばん西に住むアルフィスタを訪ねる。
佐世保の空の下、
アルファは
本当に赤かつた……

瀬戸山天主堂は緑の畑が続く丘の上、平戸島を望む海に向かって建っていた。途中で道に迷ってしまい、日傘をさして歩いている初老の2婦人に道を訪ねると、穏やかな口調で教えてくれた。「もうすぐそこですよ」と。

人、アルバイトでもうひとり先生がいるというから、若いのにすごいと感心していた。「僕はまだまだ若造だし、この辺では時習館は小さい方」だという。

年齢のことを話すと、独身の姉川さんは照れながら「もう31になってしまいました」といった。なにやら懐かしいものを感じたのは、それは言葉のスピードだったかもしれない。ゆっくりと、控えめに、しかしよどみなく発音するこの地方の言葉は、聞いているだけで人を落ちつかせてくれるものがあるような気がした。道をたずねたおじいさんにしても、レストランで隣のテーブルにいた家族も、佐々駅の駅員さんも、みな同じ言葉をしやべっていた。

五

姉川さんは鹿児島大学で生物学を勉強し、卒業してからすぐ、塾を開くために故郷の佐々に帰ってきた。最初のころは、生徒の家に外出いて家庭教師のように教えることから始め、その1年後、ようやく3畳くらいの小さな部屋を借りたそう。今ではその10倍くらいの広さがある。

就職することも考えたけれど、自分の夢を実現すべく、敢えてたいへんな道を選んだ。そんなふうに関心した。もともと先生になリたかったのだそう。きつかけは中学生のときの担任の先生。出世とか、昇進とか、そんなことは全然関心がなくて、生徒のことをいつも親身になって考えてくれる先生だった。そうじゃない教師は生徒はすぐ見分けがつく。佐々の町に帰ってきてから、時々この恩師とあうことがある。教頭や校長になると担任をもてないから、と、その先生は昇進試験の答案を白紙で出すのだそう。ヒラの教諭のまま、そろそろ定年を迎えるという。今も姉川さんはそんな先生に憧れている。

19歳の時、姉川さんは原付バイクに乗っていたところ、ダンプの後輪に巻き込まれるという大事故にあう。以来左足を不自由にして

すから、そういう無茶なことを書いていたんですよ。ATは最初から頭になかったそう

そこまでアルファに乗りたいたと熱望する姉川さんに、堀井さんはどうやら惚れ込んでしまったらしい。ペルリーナについているATを、2人乗りで総重量の軽いスパイダーに組み込めないかと考えた。そうすれば1200kgの重量制限をクリアできる。堀井さんはこの思いつきを伏見オートサービスの伏見庸三郎さんに相談した。技術的には問題ないというので、これを姉川さんに提案したという。

姉川さんのスパイダーは93年の1月に納車された。87年モデルのシルバーのスパイダーは、2000ccエンジンにキャブレターというヨーロッパ仕様。それにはZFのオートマチック・トランスミッションが組み合わされていた。これで右足だけで運転できる。おまけに「ZFのATはシフトのゲートが切つてあつて、今何速に入っているかよくわかる。シフトも楽しい」そう。

その自慢のスパイダーと75で、本土最西端の地を訪れることにした。佐々にやってくる途中、「最西端の地15キロ」という看板を偶然目にした僕は、姉川さんに案内してもらうことにした。実は姉川さんも行ったことがないと言った。

しばらくすると小さな港町にはいつてゆく。狭い道に近づくにつれて、僕は車を止め、少し歩く。丘の上には最西端の碑がある。そうだけれど、僕たちはあえてそこには行かず、堤防の上から西の海を眺めた。「最西端」という言葉にうちめされた僕は、この2日間で走った距離のことを考えていた

あるかどうか、県の教育委員会に問い合わせてみたんです。ないというのが答えだった。「採用されてから事故にあつて退職してもクビになることはない。公務員だから、でも採用される時は五体満足でないとなめたいです……緊急の時や避難の時、誘導したりするでしょう……」

その時の姉川さんの気持ちがどういうものだったか、僕のあさはかな想像力で思い描くことは到底できなかった。「でも公務員になつていたら、アルファのスパイダーなんて乗れなかったかも知れませんが、そんなことを言ってしまう自分がとても悲しかった。

六

姉川さんがアルファ・ロメオに一目惚れしたのは大学1年の時。鹿児島でジュリア・スパイダーが走っているのを見たのがきっかけだった。事故にあつた前のことだ。もともと車が好きな姉川さんの中で、アルファ・ロメオは特別な存在へと昇華した。

姉川さんの運転免許証には乗れる車の条件がつけられている。片足を悪くしてから4輪の免許を取ったからで、自動車の重量制限があるのだという。重量総重量で1200kg、これが上限である。それでもアルファ、なおかつキャブレターがついたFRのモデルを選ぶとなると、そういうアルファは限られている。

姉川さんは、ナリは小さくとも野太く響くアルファのエグゾースト・ノートが忘れられなかった。24歳の時、京都にあるアルファのスペシャルショップ「ホリイ・トレイディング」の堀井社長に手紙を出した。なんとしてもアルファに乗りたいたいという一紙だった。

最初の手紙で堀井さんにお願したのは、アルファにポリシエのジュボルドマチックをつけられないか、ということ。そうすればシフトも楽しめるんじゃないですか、でもこれは技術的に無理だった。そして次の手紙では「どこかに手動クラッチがつかないだろうか、シフトノブのあたりとか、これも難しかった。技術的なことは何もわかんないで

ど、となりの姉川さんは別のことを考えていたようだ。「いやあ、後ろで75の音がブオブオいつていて……すこかったですよ」

姉川さんを75の助手席にさせて少しだけドライブした。「いいんですか、75に乗れるなんて」と姉川さんは本当に嬉しそうだった。この辺はアルファが少ないと言う姉川さんの言葉に僕はちよつと驚いた。東京ですら少ないのだから、九州にアルファなんてほとんどないだろう、と勝手に考えていた。それは間違っていた。佐世保にはちゃんと代理店があつて、155と164は何台か生息しているのだそう。75も佐々町に1台いるという。

姉川さんは75のサイド・ウィンドウを開け放していた。スパイダー乗りには、エアコンの風より気持ちいいのかもしれない。

七

実は姉川さんには休みがない。土曜日、日曜日、夏休みや冬休み、春休みは学習塾にとつてかきいれどきでもある。あるのはお盆とお正月の数日間の休みだけ。今いちばんしてみたいことは、休みをとってアルファでドライブ。「天草あたりに行つてみたい」という。東京から佐世保まで1500kmを走ってきた僕にとって、佐世保は遠いところだ。それ以上に姉川さんにとって天草は遠いのだ。

期末テストをひかえた時習館には、生徒がだんだん集まってきた。忙しい姉川さんのお邪魔にならないように、午後4時、時習館の前で僕は姉川さんと別れた。交差点を曲がりきるまで75を見送ってくれた。僕は75を前に進めながら、振り向いて何度かおじぎをした。

東京に帰ってニュースで知つただけけれど、僕が初めて訪れた九州は、その日すでに梅雨明けをしていた。確かにそこには東京と違う空気が太陽、湘南とは違う砂浜や海があつた。生来穏やかな人たちが暮らしていた。それにアルファの友がいる。外は淡いシルバーだけれど、心はまこうかたなき真紅に輝いていた。姉川さんと彼のスパイダー。彼に会うために、いつかまた僕は出発するだろう。「ゴー・ウエスト」と歌いながら。



白浜海水浴場から西に沈む夕陽を望む。砂浜にはゴミひとつない。細やかで乾いた砂のうえを歩くのは心地よく、時の過ぎるのも忘れてしまった。もう7時を過ぎているというのに。



長崎には大小さまざまな教会が多いが、いずれも海辺や山の上など、わりに辺鄙なところにある。今ではそんなことはないだろうが、「隠れキリシタン」という言葉をなぜだか思いだしてしまつた。浅子の教会の前で。姉川さんとスパイダー。